

2023 年度

愛知の読書・学校図書館教育

(第 52 集)

も く じ

I はじめに	2
II 研究の内容	
・ 教育課程編成活動について	3
・ 実践事例	4
III 第 73 次教研のまとめ	6
(1) 図書館運営・連携について	6
(2) 情報活用について	7
(3) 図書の活用について	7
(4) 読書活動について	8
(5) 情報交換・研究協議	10
(6) 助言から	10
IV おわりに	11

愛知県教員組合連合会 教育課程研究委員会「読書・学校図書館」部会
2023 年度 教育課程研究委員

◎部長 ○副部長

ブロック推薦

名古屋			尾 張			三 河		
氏 名	単組	分会	氏 名	単組	学校名	氏 名	単組	分会
○水野 徹	名古屋	東築地小	◎遠山友加里	一宮	木曾川西小	○杉浦恵梨子	安城	丈山小
原 由布子	名古屋	千成小	木村 俊介	春日井	丸田小	岡本 侑馬	碧南	西端中

第 69、71、72 次教育研究全国集会リポート提出者

	氏 名	単組	分会
第69次	安井 智奈美	名古屋	明徳小
第71次	平松 亜弥美	豊橋	八町小
第72次	福永 えりな	岡崎	山中小

第 73 次教育研究全国集会リポート提出者 日高 太地 (豊田・石野中)

I はじめに

読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものといわれている。しかし、スマートフォンやゲーム機等の情報端末が発達し、さまざまなSNSや動画配信サービスが普及する中、子どもたちの生活も変化し、「読書離れ」が指摘されている。今日、子どもたちに読書の楽しさを味わわせ、読書を通して豊かな心を育んでいくことは重要な課題である。

また、本を紹介して意見や感想を交流することで、人と人とがつながりを持ち、心を通わせていくことも求められている。SNSをきっかけに起こるトラブルや事件は、人との関係の希薄さが引き起こしている一面がある。こうした子どもたちに読書による人との間接体験をもたせたり、友だちや教員とのふれあいの場をもたせたりする活動を積極的に取り入れることが人とのかかわりの良さを感じさせる上で有効であると考えられる。

そして、学校現場では学習者用タブレット端末が日常的に活用されるようになり、生成AIや対話型AIなどにも注目が集まっている。情報化が高度に進んだ現代、子どもたちにも、膨大な情報の中から情報を収集・活用していく力が求められている。学校図書館では、以前より情報活用能力の育成を課題の一つとしてきたが、より一層の整備・充実をはかるとともに、情報を収集するだけでなく、自分にとって本当に役立つ情報であるかを正しく判断・選択しながら自らの課題解決に活用していく技能を高める指導を行っていくことが大切である。

こうしたことから、現代の子どもたちにとって必要な学校図書館教育の役割は、次の3点であると考えられる。

- 読書の楽しさを味わわせ、すすんで読書に親しむ態度を育て、豊かな感性や情操を育む「読書センター」としての役割
- 友だちやいろいろな人との心の交流を通して、豊かな人間形成をはかるための「学びの場」としての役割
- 利用しやすい環境を整え、自らの課題を解決するために、図書資料を効果的に活用する能力や態度を培う「情報・学習センター」としての役割

学校司書の配置がすすめられ、司書教諭と学校司書との連携による実践の報告も増えている。また、学習者用タブレットをはじめとするICT機器を活用した、新しい学びの形も模索されている。子どもたちが多くの本と出会い、自らの課題を解決していくことで、現代社会を力強く生き抜く力を養い、よりよい未来を築いてくれることを願っている。

II 研究の内容

教育課程編成活動について

心豊かな子どもを育てていくためには、読書を通してさまざまな体験をしたり、本を紹介して人と人がふれあえる活動を行ったりすることが大切である。また、多様な情報を収集するとともに取捨選択し、自ら課題を解決する力を培っていくことも大切である。そのためには「読書センター」としての役割のみならず、「学習・情報センター」として魅力ある図書館運営と活用についての研究が重要となってきた。

本分科会では、言語活動の充実をはかりながら、「ゆたかな学び」のある読書指導のあり方や、読書活動を取り入れた授業実践の手だてを追究してきた。そして、教育課程編成については、次の点を考慮した。

教育課程編成にあたっての基本的な考え

- 「基礎・基本」について
 - ・ 読書の楽しさを味わい、すすんで読書に親しむ態度を育てるとともに、読書の習慣化や継続化をはかる。
 - ・ 読書活動を通して、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表現する力」を培っていく。
 - 「生きてはたらく力」をのばすための重点
 - ・ 自らの課題を解決するために、すすんで資料を収集・選択して活用することができるように、段階を追って系統的に利用指導を行う。
 - ・ 一人ひとりの学びを大切にし、学ぶ喜びやわかる楽しさを味わうことができる授業研究を行う。
- また、学校図書館において「わかる授業・楽しい学校」を実現させていくためには、読書指導と利用指導を学校の教育課程に位置づけ、系統的に指導していく必要がある。

「ゆたかな学び」を育んでいくため、小・中学校における学びのポイントに沿って実践を行っている。

【小・中学校における「ゆたかな学び」のポイント】

		読書指導		利用指導
		読書能力	読後の活動能力	図書館活用の実践力
小 学 校	低	やさしい読み物を楽しく読む。	興味をもった場面を話したり絵に表現したりする。	好きなことや疑問に思ったことを調べる。
	中	いろいろな読み物を読み、読書範囲を広げる。	感動した場面を話したり絵に表現したりする。	知識や情報を得るために図書館を活用する。
	高	関心をもってさまざまな分野の本を読む。	感想を意見交流したり、効果的な表現方法で表現したりする。	課題や目的に応じて必要な情報を収集し、取捨選択して活用する。
中 学 校		目的に応じて適切な本を選び、すすんで読む習慣をつける。	感想や意見を交流していくことで、ものの見方や考え方を広げ、深める。	参考資料の種類や特性を知り、活用する。目的に応じた方法で発信する。

「かかわりつなぐ学校図書館～外国人生徒も利用しやすい図書館づくり～」(中学生)

教育活動にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」

- ・ 読書の楽しさを味わい、すすんで読書に親しむ態度を育てるとともに、読書の習慣化や継続をはかる。
- ・ 読書活動を通して、「考える力」「感じる力」「表現する力」を培っていく。

○「生きてはたらく力」

- ・ 自らの課題を解決するために、すすんで資料を収集・選択して活用することができるように段階を追って系統的に利用指導を行う。
- ・ 一人ひとりの学びを大切にし、学ぶ喜びやわかる楽しさを味わうことができる授業研究を行う。

1 ねらい

さまざまな背景やルーツをもつ生徒が学校の中で共に過ごす中で、誰もが利用しやすい図書館環境を整えることをきっかけに、「図書から得られる楽しさやおもしろさ、そして、新しい発見を味わってほしい」「日本人生徒と外国人生徒のかかわりを図書でつないでいきたい」と考えた。

2 実践例における「ゆたかな学び」のポイント

外国人生徒のニーズや日本語能力に応じた図書の配架や提供をし、日本人生徒だけではなく外国人生徒も利用しやすい環境を整備することで、誰もが利用しやすい図書館をめざす。

読書を通して、その図書の魅力や感想を仲間と共有できる場や機会を設けることで、より図書に親しみをもち、積極的に図書を手にとることができるようにする。

3 実践について

(1) 外国人生徒のニーズや日本語の力に合わせた図書館環境の整備

㊦ポルトガル語・英語による案内表示・ポップの作成・掲示、おすすめ本の紹介

委員会活動の一つとして行っているおすすめ本の紹介文作成を、外国語で作ることを提案した。すると、図書選びや日本語で書くことに苦戦をしていた外国人生徒が意欲的にペンを取り、いきいきと活動に参加するようになった。更に、日本人生徒もひらがなで書くなど、外国人生徒に配慮したポップを書くことができた。母国語でおすすめ本の紹介文を作成したことで、同じ国出身の生徒たちの興味を引き、図書館に足を運ぶようになった。また、図書委員にもかかわらず、図書当番の時にしか図書館を訪れなかった外国人生徒が、他生徒がどんな反応を示しているのかを知りたくなり、図書館を頻繁に訪れるようになった。

㊧外国語図書の配架場所の変更、やさしい日本語図書コーナーの設置

外国語図書の配架場所を図書館の前の廊下に設置をしたところ、図書館が開館している昼休みだけでなく、移動教室の際にも目にするようになった。母国語での図書があることを知った外国人生徒は、そのコーナーから朝読書の図書を選ぶようになった。朝読書の時間に学級文庫の図書を眺めるだけだった外国人生徒が、自ら図書を手にとるようになったことは、日本語能力が低い外国人生徒と図書をつなぐ、大きな一歩となった。

一方で日本語を覚え始めた生徒たちは、日本語に対する興味関心や意欲が高いことがわかった。そこで、「やさしい日本語図書コーナー」として、比較的内容のとらえやすい絵本を設置した。しかし、実際に借りて読もうとする外国人生徒はほとんどいなかった。言語の壁は

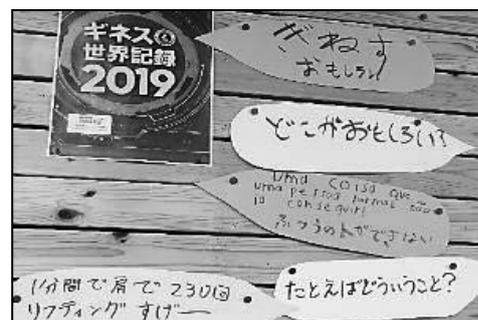
あっても彼らも同じ中学生であるため、絵本を借りて教室で読むことには抵抗がある様子だった。そこで、コーナーの一部に絵本ではなく小学校低学年むけの読み物資料を配架した。小学校低学年むけの図書は活字が大きく、短編で読みやすい。また、漢字にはふり仮名があることが利点としてあげられる。加えて、絵本とは異なり、表紙の体裁、書籍の大きさは小説などとほとんど変わらないため、外国人生徒の自尊心を損なわないであろうと考えた。朝読書用の図書として借りる外国人生徒の姿が徐々に増えていった。

(2) 生徒間で図書に対する感想を共有するためのキャンペーンの場の設定

図書委員会主催で、学級対抗のBOOKコメントキャンペーンを実施した。このキャンペーンでは、借りた図書の感想や見どころをコメントカードに記入し、その数を競った。キャンペーン中は、ふだん図書館に足を運ばない生徒が来館する姿も多くみられ、生徒の図書館への興味を引くきっかけとなった。実際に、図書の貸し出し数も、前年度の同月と比べ、2倍以上の増加となった。この「競う」という感覚が「本をもっと手に取ろう」という思いにつながったと考える。一方、「今、一番だね。」「もっと、借りないと。」という声が聞こえるようになった。「競う」ということばかりに目が行き、生徒の心は図書の中身を深く味わうところまで至っていなかった。

これらの課題を改善するために、「競う」から「発信」に方向を変えたコメントリレーキャンペーンを実施することにした。コメントカードは吹き出しの形とし、前のコメントの下に次のコメントをつなげて掲示していく方法をとった。生徒にとって親しみの感じられる掲示としたことで、以前の単独のカードよりも他者とのつながりを感じられるようになった。その掲示を見た他の生徒は、掲示されている図書のコメントに対し、自分のコメントを続けて発信していった。他者とつながることで、一冊の図書についてさまざまな見方ができるようになった。「面白かった」

「楽しかった」などの表面的な感想から、「キャラクターの想像力の豊富さが魅力的だよね」や「この場面の気持ちに共感できるよね」などの読みの深まりを感じる感想が増えていった。また、自分のコメントへの返信が気になり、再度図書館へ足を運ぶ生徒の姿もみられた。外国人生徒のコメントも徐々に増え、図書を介した生徒どうしのかかわりが増えた。



コメントリレーキャンペーンの掲示

4 実践のまとめ

(1) 成果

廊下や国際教室など、生徒がふだん利用する場所に図書環境を整えたことで、図書館を訪れることが少ない外国人生徒の図書への関心を高めることができ、図書に触れるきっかけとなった。また、中学生むけの図書にこだわらず、生徒の実態に合った図書を学校司書と協力しながら配架・提供したことで、「図書＝難しい」と考えていた外国人生徒の図書利用も増えていった。さらに、個人で楽しみ親しむイメージの強かった図書を、生徒たちが感想を共有できるようにしたことで、新たな図書の魅力に気付くきっかけとなった。そして、かかわりの薄かった外国人生徒と日本人生徒が互いに図書を通して思いを伝え合うことにもつながった。実践を通して、外国人生徒にとって図書は「興味・関心のあるもの」から「利用するもの」に変わり、「他者とかかわるもの」へと発展させることができた。

(2) 課題

多くの生徒が図書館に足を運び、図書を通してかかわるようになったが、まだ生徒自身が必要性を感じて図書を活用しようと思う段階までには至っていない。今後は、司書教諭だけではなく、他の教員とも連携をはかり授業とのつながりをつくっていく必要があると考える。

Ⅲ 第73次教研のまとめ

(1) 図書館経営・連携について

名古屋と稲沢の学校から、図書館運営や連携に重点を置いた実践が発表された。

名古屋の学校からは、中学校における「本を通して豊かな人間関係を築くことのできる生徒の育成」をめざす実践が報告された。この学校で事前調査から浮かび上がる生徒の実態は、友だちから本を薦められることはあるものの、学校図書館はあまり利用されていないというものであった。一方で図書委員会に所属する生徒は、委員会活動に意欲的であった。そこで、図書室の環境整備、図書選定への生徒の参加、本を通して生徒どうしがかかわり合う活動を通して、進んで図書室に来室し、読書や友だちとの本を通したコミュニケーションを楽しむことができる生徒を育成することをめざした。

環境整備では、正しく図書を分類して配架を行った。また図書委員会で本の帯やポップを作成し、図書の紹介コーナーを充実させた。また、SDGsなど、学校で取り組んでいる他の活動とも連携した学習コーナーの設置をした。図書選定では、業者の協力を得て新刊の図書を準備してもらい、生徒に最新の図書に直に触れる機会を設け、生徒に選定をさせた。普段は来室しない生徒も図書の選定には進んで参加する様子がみられた。図書選定に生徒の声を取り入れることで、生徒のニーズに合った図書を充実させることができた。本を通して生徒どうしがかかわり合う活動では、生徒によるお薦めの本を記入した掲示物の作成、ビブリオバトルや読み聞かせの実施、全校テレビ放送での図書の紹介などの活動を行った。

この様な活動を通して、図書室に来室する生徒が多くなり、お薦めの本は何かと図書委員に尋ねる生徒が多くみられるようになった。また図書委員は、相手の好みを聞きだしたり、他の委員と相談したりしながら対応するなど、本を通したコミュニケーションが広がる様子がみられるようになった。学校図書館が友だちと気軽に行ける、明るく雰囲気の良い場所となる実践の報告であった。

稲沢からは、「自ら本を手に取り、学びに生かすことができる児童生徒の育成」をめざす小学校と中学校でのそれぞれの実践が報告された。

稲沢の小学校では、学びに役立つ図書館づくりのために、学校図書館の地図の掲示、蔵書検索システムの導入、図書資料を活用できる単元一覧の作成、図書館内の企画展示、教員による本の紹介ポップの作成を行った。図書館の地図の掲示では、地図を見てから入室する児童が多くみられ本を探す際や本を返却する際に役立っていた。蔵書検索システムを導入することで、本を探す際の選書がスムーズになった。単元一覧を作成することで教員が図書館の蔵書について把握しやすくなり授業で図書資料が活用しやすくなった。図書館内の企画展示では、理科の植物の学習に関連する本と実際の植物を併せて展示したことで、関連する植物の本に興味を持つ児童が多くみられた。教員による本の紹介ポップでは、知っている先生の紹介する本に対して興味を示す児童がみられた。

稲沢の中学校では、学びに役立つ図書館づくりをすすめるために、各階の廊下に図書委員による学習に関する本の紹介カードと実物の本の設置を行った。そうすることで、普段図書館に足を運ばない生徒も気軽に本を手にとることができた。また、廊下に職業に関する図書と短歌に関する図書を設置して学習コーナーとすることで、職業や短歌について調べる生徒の姿がみられた。

これらの実践によって、児童生徒が気軽に本を手にとるようになった。本を活用した学びの良さに気付かせることができ図書館が楽しく学ぶ場となることにつながる実践の報告であった。

(2) 情報活用について

一宮と豊田の学校から、情報活用の活用に関する実践が報告された。

一宮の学校からは、中学校における「主体的に図書館と関りをもつことができる生徒の育成」をめざす取り組みが報告された。図書館環境の整備、学校司書によるオリエンテーションの実施、修学旅行に関する調べ学習、SDGsに関する調べ学習を行った。インターネットと図書資料の双方の利点に気付かせることを目的とした実践である。

図書館環境の整備では、分類番号をわかりやすく掲示し、利用頻度の高いSDGsに関連する図書はブックトラックに配置した。学校司書によるオリエンテーションでは、日本十進分類法による配架のしくみを知らせたあと、ペア活動で本を探す取り組みと本とインターネットそれぞれのメリット・デメリットの確認を行った。修学旅行に関する調べ学習では、修学旅行の行先である東京都のSDGsについて本とインターネットを併用して調べる活動を行った。インターネットで調べていた生徒の中には、インターネットと本で正反対の記述があるという発見を通して、インターネットの信頼性を確認する姿がみられた。また、どの情報が正確なのか戸惑う姿がみられた。この様な実践を通して、本は詳しく書かれている、絵を使ってわかりやすく説明されている、他の情報に結び付けられており色々な知識が得られる、といった図書資料の利点に気付くことができた。インターネットには無い図書資料の利点に気付ける実践であり、図書資料とインターネットの両方を上手に活用することの大切さを感じさせられる報告であった。

豊田の学校からは、中学校において百科事典を活用した「図書を活用し、主体的に課題追究できる生徒の育成」をめざす取り組みが報告された。

初めに百科事典の活用に慣れ親しむ活動を実施することで、百科事典の楽しさ、わかりやすさを実感する生徒が多くみられるようになった。次に、言語活動を取り入れた課題設定の場の設定として、社会科地理分野の学習で、日本の課題や危機について追究課題を実施した。その中で、自分が調べたいことを「問い」として立ててテーマ設定が出来るよう「テーマをしぼりこむ支援」と「問いを立てる支援」を手だてとして行った。「テーマをしぼりこむ支援」については「ペンタゴンチャート」をもとに「円形チャート」を作成してテーマを絞り込めるようにした。「問いを立てる支援」として、「謎作成マトリクス」と題した質問疑問マトリクスを資料として提示し、参考とすることで問いを立てやすくなるよう支援した。それによって、思考を可視化し自分の興味に沿ったものか吟味することができ、課題設定に役立たせることができた。その後、百科事典の情報を起点にした追究活動の展開、情報を整理し思考を深めるための言語活動、他教科と連携した教科横断的な学習展開を行うことで、生徒の意欲を高めさせることができた。

課題解決に大切な情報活用能力を高めていくには、教育活動全体で継続的・計画的に指導していく必要があることを感じさせられる報告であった。

(3) 図書の活用について

図書の活用については、二つの実践報告がされた。

西尾の小学校からは、図書とICT機器の活用を通して、書いて表現する楽しさを実感する授業づくりについての実践が報告された。

小学校5年生にとって未知の領域である枕草子や聞き慣れない古語に触れ、興味・関心をもって読むことで、情景を想像しながら読む力をのぼし、その中で感じた季節のよさを自分の言葉で表現することができた。

教材と出会う段階では、学習への興味・関心を高めるために、タブレットを使い映像で枕草子の春夏秋冬を紹介した。また、初めは現代語訳を示さず、映像と原文から内容を想

像することで、友だちと相談したり、前後の文から意味を予想したりするなど、主体的に学ぶ児童の姿がみられた。

図書とICT機器を活用する実践として、文章と背景画を組み合わせた作品を作る活動を行った。枕草子にならって、自分が感じる季節のよさを文章で書き、そこに自分がイメージする写真やイラストを図書の中から探し、それを組み合わせてオリジナルの作品を完成させた。図書資料は本の表紙や挿絵だけでなく、植物図鑑や写真集など、多様な資料を用意することで、新しい図書との出会いが広がった。また、文章だけでなく、背景画を組み合わせることで作品のオリジナリティーが増し、達成感や充実感、文章を書いて表現する楽しさを実感できた。

刈谷の中学校からは、図書を活用し新聞にまとめる活動を通して、根拠を明確にしながら読み取り、自分の考えを広げ深めることができる生徒を育成する実践が報告された。

図書を使って作品について調べることで、その時代背景や作者についてより深く知ることができ、登場人物の心情や考え方について根拠が明確になると考えた。

導入では、教材である「平家物語」についてその時代や信仰、源氏、平家について図書を使って調べる活動を取り入れた。資料である図書は市の図書館で借り、選定には司書教諭の協力も仰ぎ、写真や絵の多い小学生むけの本から、詳細な史実まで載っている大人むけの本まで用意した。同じ平家物語についての図書でも、テーマが異なり、調べている内容に対してどの図書が適しているのか、生徒どうして話し合う姿がみられた。

次に、調べたことを新聞にまとめた。その活動を通して、源氏と平家の成り立ちや、繁栄した平家一門がいよいよ滅亡を迎え、武士である源氏が世を治めようとする混乱した時代であることを正確にとらえることができた。

図書を使い調べ学習をすることで、その作品の時代背景や作者の思いを正確にとらえることができ、登場人物の心情を読み取り、自分の考えをもつ上で根拠が明確になり、自信をもって学習に取り組むことができた。しかし、考えを深めるところでは、現代を生きる自分自身と照らし合わせて考える生徒が一部にとどまってしまい不十分であった。学習課題を工夫し、具体的な視点を示せば、さらに考えを深めていける生徒が育つと考えられる。

(4) 読書活動について

読書活動に関する実践が四つ報告された。

豊橋の小学校からは、対話的な読書活動を通して、読み深めることのできる子の育成をめざした実践が報告された。

物語を読む意欲を向上させるために、ビブリオバトルの活動を行い、対話的にかかわり合う場を設けた。まず、コラボノートというアプリを使い、学習メモを作成した。画面上のメモをみんなで見合うことで、上手に作成できている子のメモを参考にでき、自分の気付きにつながった。また、色分けされた付箋の機能を使うことで、「おもしろいと思った言葉や表現」と自分の考えである「深読みポイント」とを上手く整理できた。さらに、ビブリオバトルを行う際も、自分で整理した「深読みポイント」を中心にプレゼンをすればよいことに気づけ、活動の助けになった。ビブリオバトルの中のディスカッションタイムでは、多くの子が質問し、友だちの本に興味をもっているとわかった。ビブリオバトル後は紹介された本を借りる児童も多く、読書意欲の向上につながった。

次に「注文の多い料理店」の読み取りを、深読みポイントを意識して行った。題名の意味や構成、色彩表現など、物語を読み深めるためのポイントを意識することで、何度も作品を読み返したり、友だちと意見を交流したりする姿がみられた。何度も読み返したり、

友だちの意見と自分の考えを比べたりして、物語を読み深めていった。

岡崎の小学校からは、1・6年生の異学年交流を柱として、読書を通して他者との交流を深め、互いの成長につながる活動の実践が報告された。

6年生から1年生への読み聞かせ活動を実施した。1年生は大好きなペアのお兄さん、お姉さんに本を読んでもらい、読書に対する前向きな気持ちが育つ。また、6年生は1年生のことを考えながら本を選び、読み方を考える中で、相手を思いやる気持ちが育つと考えた。

6年生には、ペアの1年生に読み聞かせをしたい本を選ぶときに、なぜその本を読んであげたいのか、内容が1年生にふさわしいか、文の長さが長すぎないかなどを考えて本を選ぶように指導した。また、本を4・5冊準備し、そこからペアの子が選べるようにした。本を選ぶ際も、題名を紹介するのではなく、その本のキーワードを考えて紹介することで、1年生が題名や表紙にとらわれず、新しい本に出合うことができた。本を選ぶ6年生は、自分が読んだことのある絵本を懐かしみながら真剣に選ぶ姿がみられ、相手の年齢を考えながら選ぶことができていた。

1年生は、読み聞かせを聞いた後に6年生へ感想を伝えて、感想カードと一緒に作る活動をした。言語化するのが難しい1年生のために、どんな内容だったか、たくさんの表情の中から選ぶことができるようにワークシートを工夫した。また、6年生から1年生へ問いかけをしながら感想を聞き取るようにして、どんな子でも感想カードを作成することができるようにした。

読み聞かせの後、より多くの1年生が図書室へ足を運ぶ姿がみられ、今までに読んだことのないジャンルの本を借りる児童が増えていることから、有効な取り組みであったと考えられる。また、6年生はペアの1年生のことを分析しながら本を選んだり、相手がわかる言葉で問いかけをしたりと、相手のことを思いやる姿がみられた。

別の岡崎の小学校からは「だるまさんが」の絵本作りの実践を通して、仲間とともに、言葉のイメージを広げ、本を読むことを楽しむ子の育成をめざした実践が報告された。

みんなで本を楽しむという経験が、それ以降の読書生活の好ましい素地となっていくと考えた。また、絵本作りの意欲付けとして、初めに誰に見てほしいかを考えさせた。児童は、幼稚園の先生、校長先生など次々に見せたい人をあげ、やる気に溢れていた。

言葉のイメージを広げていくために、擬態語、擬音語について学び、その語から想像する場面について話し合った。具体的には、「ぱくぱく」ではなく、「ごりごり」だと、どんな物を食べている場面になるかや、「てくてく」と「よいしょよいしょ」では、どんな山を登っている場面になるかなどを考えさせた。さらに、本を読むだけでなく言葉を動作化する活動を取り入れることで、よりその言葉のもつイメージを広げるようにした。

友だちや自分が出した言葉や場面をみんなで考える時間をとったことで、これまでの実践よりもイメージが明確になった。また、友だちと一緒に楽しみながら言語活動に取り組むことで、自信をもって活動でき、休み時間にも読書をする児童が増えた。

豊田の小学校からは、目的にあった本を選び、すすんで読書に親しむことのできる子の育成をめざす実践が報告された。

キラキラブックタイムという読み聞かせ活動を行い、児童が多くの本に触れる機会を設ければ、読書に親しむ児童が増えると考えた。また、図書館司書に協力してもらい、単元や、季節に応じて読書コーナーを設置して、さらに多くの本に触れられることができるようにした。

目的にあった本を選び出す力をつけるために、「ウチ読タイム」という活動を行った。「ウチ読タイム」とは、児童が自分の保護者に家で読み聞かせをする活動である。対象である

保護者のことを考えて本を選び、読み聞かせをし、その感想をもらうことで、自分の活動を客観的に見直していった。さらに、他教科の学習をするときも、積極的に図書室で調べ学習をしていくことで、目的にあった本を選ぶ力を育てるようにした。単発的な活動でなく、小学校入学時から卒業まで、系統的に図書活動をしていくことが力をのばすうえで大切だと感じた。

(5) 情報交換・研究協議

○ 学校司書との連携の工夫

学校司書とどのような連携をしているかが話題となった。先生たちのおすすめの本のコーナー作り、分類クイズなどの学校図書館の掲示物作りや選書を図書館担当と一緒にしていることが報告された。また、学校司書と委員会の児童・生徒をつなげるために、購入した本が届くと児童・生徒に伝えに行かせたり、委員会のスタンプラリーで学校司書の好きな本を尋ねるといった項目を作ったりして、工夫をしている学校もあった。また、前月に「学校司書にやってほしいこと」というアンケートを取り、その中から選んで活動してもらう学校があった。その他に、学校図書館や学校司書と先生たちとつなげるために、先生によるブックトーク週間を設定し、先生たちに学校図書館に足を運んで本を選んでもらったり、学校司書と相談したりするように取り組んでいる学校があった。図書館担当は、学校司書と児童・生徒や先生たちをスムーズにつなげるために間に入って調整する大きな役割があることがわかった。

○ 家庭・地域との連携の工夫

家庭・地域との連携については、読み聞かせボランティアや本を寄付してもらっていることが報告された。働き方改革やコロナ禍によって活動が途切れてしまったり、調整をする図書館担当の負担が増えていたりするという意見が出された。小学校での読み聞かせは児童がとても楽しみにしているため、家庭・地域の協力の形をもう一度見直しいく必要があると考えられる。

(6) 助言から

○ 実践を通して

図書資料とICT機器の両方を活用した学習、百科事典の特徴を生かした調べ学習、企画展示や図書の充実の仕方、学校司書や公立図書館との協力などの手だてが報告された。これらの手だてによって、児童・生徒が主体的に学校図書館とかかわり、学びに生かしていく態度が育っていくと感じた。また、研究対象として中学校の委員会活動による学校図書館作りの実践や小学校で異学年交流を中心とした実践があり、本を通じて他者と交流を深め、互いに成長し、豊かな人間関係を築くことにつながっていくことができる読書・学校図書館教育の意義を感じた。

○ 読み聞かせを学校で行う大切さ

読み聞かせの効果を確認し直してしてほしい。例えば、アメリカでは語彙を増やしたり、読み書きの能力を高めたりするために効果があると考えられている。日本では共感性や安心感を高めるなど心情を育てると考えられている。ただ、日本の家庭で読み聞かせを行う割合は低下してきていて、両親がいる家庭で7割、一人親家庭3割実施というデータがある。その点で学校での読み聞かせの意義は大きいと考えられる。教員は、読み聞かせに集中できるような場の設定を意識したり、音を大切にしながら読んだりする工夫をして、読書は楽しいということを伝えてほしい。

○ 読みの技術を学校で教える大切さ

書いてあることを正しく読み取ることができない大学生が増えている。これは、小・中学生から読みの技術を身に付けていないからだと考えられる。教材・資料を提示し、気が付いたことやわかったことを書かせるだけでは技術は身に付かない。学校で、ポイントを教え、それを一般化し、そのポイントで読むという思考ツールを継続的に繰り返し取り組み、身に付けさせていく必要がある。

○ 調べ学習における個別最適化な学び

調べ学習では、課題を設定し、解決するための手だてを考え、それに必要な資料を図書やICT機器で準備して課題を追求し、何がわかったかを相手に伝えるように書いて振り返ることを積み重ねていってほしい。図書資料を使って調べる経験を積むことで、自分で調べることができる達成感やさらに調べたいという主体性を育むことができる。そのためには、子どもたちが興味をもつ実践・手だてのネーミングの工夫や図書の充実、学校司書や公共図書館との協力が不可欠になる。子どもたちの学びを豊かなものにできるように、図書館担当として取り組んでいってほしい。

IV おわりに

本年度の県集会では、学校司書や市立図書館と連携をはかりながら、教科や単元の学びにつながる本を、子ども自らが選択して、問題解決のために活用していく実践についての討論が中心となった。また、物語だけではなく、図鑑や百科事典などの図書資料の活用を手だてとして講じる有効性について話し合われた。

個別最適化を推奨する現在の教育においては、学びの材料として図書資料を活用したり、物語の内容を読み取りながら理解したりすることが重要性である。また、インターネットと図書資料による調べ学習のそれぞれの利点を子どもが理解したうえで、効果的に活用していかなくてはならない。さまざまな教科において読書・学校図書館との併用をすすめていくための実践報告、および、活発な意見交換が行われた。

情報交換では、図書資料の活用、図書館運営、読書活動をすすめていくための、教員と学校司書との連携や保護者とのかかわりについて情報交換がされた。担任する学級とは異なる学級で読み聞かせを行い、交流の中で読書の楽しさを感じさせるという事例や図書資料として活用したい図書を学校司書と連携しながら選定するといった事例が紹介された。

限られた時間の中でも、読書活動や図書の大切さを子どもに実感させることができる支援や教育をめざし、各自治体の図書教育の動向が意見交換された。

今後に残された課題は以下の3点である。

- (1) インターネットの普及に伴う読書離れに対して、調べ学習での図書活用や、学校司書との連携を積極的に行い、それらを何年もかけて積み重ね、読書を習慣化していく工夫
- (2) 教科学習の中で、子どもたちが課題解決や自分の意見をもつ材料として図書を活用ことができるように、思考ツールなどを用いて使いたいと思わせるような工夫
- (3) 子どもたちが物事や学びに対して、具体的な意見や根拠をもてるように、読書活動や図書活用、図書館連携を行う工夫

学校の実情はさまざまであるが、これからも、子どもたちが読書を楽しみ、読書活動が豊かな心を育むとともに、学びの基礎を築くものになるよう取り組みを続けていきたい。